



Title	Industrialization, Urbanization, and Mortality in Modern Japan : A Spatio-temporal Perspective on Death from Tuberculosis
Author(s)	花島, 誠人
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59873
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【3】

氏 名 はな しま まこと と
花 島 誠 人

博士の専攻分野の名称 博 士（経済学）

学 位 記 番 号 第 2 5 7 0 6 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 24 年 10 月 19 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当
経済学研究科経済学専攻

学 位 論 文 名 Industrialization, Urbanization, and Mortality in Modern Japan:A
Spatio-temporal Perspective on Death from Tuberculosis
(近代日本における工業化・都市化・死亡：結核死亡率に関する時空間
的展望)

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 友部 謙一
(副査)
教 授 澤井 実 准教授 山本 千映

論 文 内 容 の 要 旨

日本の戦間期は、工業化、都市化、および疫学転換が複合的かつ重層的に進行した時代としてとらえることができる。この期間の死因別死亡率には明らかな地域差があり、結核においてそれは特に顕著であった。近代日本において結核が蔓延をみた背景には、感染を促進する疫学的要因が介在していたとする先行諸研究があるが、工業化および都市化過程との対比において結核死亡率を分析した事例はまだ少ない。本

研究では、社会経済的諸要因と結核死亡率との関連について、府県別データを利用しながら時空間的分析による接近が試みられる。

“序論” (1 章) では、本研究の目的と視点・視野が設定され、Omran の疫学転換と McKeown の学説を起点に先行研究が概観された後、社会経済史的視野における死亡率をめぐる論点が明らかにされる。

“データセットの構築” (2 章) では、本研究の分析における主要なデータセットの概要と、内務省衛生局の死因統計から時系列データベースを構築するための手順と、主要な死因の時系列統合の実際が解説される。

“日本の死亡率の時系列推移” (3 章) では、上記のデータを使用して近代日本の死亡率の時系列推移が検討され、府県別の時系列推移パターンが三種類に分類できることが示される。次に、顕著な地域差が認められた、結核死亡率の時系列推移が詳細に検討される。

“結核死亡率の地域差” (4 章) では、結核死亡率の地域差をもたらした要因について戦間期の一断面 (1924 年) に焦点を絞り、都市化、工業化の側面から空間的な分析が試みられる。さらに、死亡率に特異な傾向が見いだされた長野、石川両県についてその要因が考察される。

“仮説および実証” (5 章) では、上記の検討を踏まえて、戦間期における若年女子の結核死亡率の地域差を説明する作業仮説が提示され、地理的空間要因を考慮したモデルによって検証される。次にこの検証結果に基づき、結核に対する地域の脆弱性が工業化、都市化、および労働移動という諸要因によって規定されることを示す概念モデルが提案される。

“結論” (6 章) では、概念モデルの社会経済的含意が考察され、経済史における結核死亡率の持つ意義が述べられる。結論として、戦間期における結核死亡率は、日本の経済発展のために地域が強いられた人的損耗(コスト)の指標であり、換言するなら、工業化および都市化に伴う生命リスクの量的表現に他ならないことが示される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

[論文内容の要旨]

日本の戦間期は、工業化、都市化、および疫学転換が複合的かつ重層的に進行した時代としてとらえることができる。この期間の死因別死亡率には明らかな地域差があり、結核においてそれは特に顕著であった。近代日本において結核が蔓延をみた背景には、感染を促進する疫学的要因が介在していたとする先行諸研究があるが、工業化および都市化過程との対比において結核死亡率を分析した事例はまだ少ない。本研究では、社会経済的諸要因と結核死亡率との関連について、府県別データを利用しながら時空間的分析による接近が試みられる。

第 1 章では本研究の目的と視点・視野が設定され、Omran の疫学転換と McKeown の学説を起点に先行研究が概観された後、社会経済史的視野における死亡率をめぐる論点が明らかにされる。

第 2 章では本研究の分析における主要なデータセットの概要と、内務省衛生局の死因統計から時系列データベースを構築するための手順と、主要な死因の時系列統合の実際が解説される。

第 3 章では上記のデータを使用して近代日本の死亡率の時系列推移が検討され、府県別の時系列推移パターンが三種類に分類できることが示される。次に、顕著な地域差が認められた、結核死亡率の時系列推移が詳細に検討される。

第 4 章では結核死亡率の地域差をもたらした要因について戦間期の一断面 (1924 年) に焦点を絞り、都市化、工

業化の側面から空間的な分析が試みられる。さらに、死亡率に特異な傾向が見いだされた長野、石川両県についてその要因が考察される。

第5章では上記の検討を踏まえて、戦間期における若年女子の結核死亡率の地域差を説明する作業仮説が提示され、地理的空間要因を考慮したモデルによって検証される。次にこの検証結果に基づき、結核に対する地域の脆弱性が工業化、都市化、および労働移動という諸要因によって規定されることを示す概念モデルが提案される。

第6章では概念モデルの社会経済的含意が考察され、経済史における結核死亡率の持つ意義が述べられる。結論として、戦間期における結核死亡率は、日本の経済発展のために地域が強いられた人的損耗(コスト)の指標であり、換言するなら、工業化および都市化に伴う生命リスクの量的表現に他ならないことが示される。

[審査結果の要旨]

本論文は1930年代後半に結核死亡率が再度上昇した原因を、旧来の死因統計を徹底的に見直した独自の修正統計とそれに基づく空間統計学的分析により解明し、大規模な都市化や工業化が進展していた当時の日本社会において、罹患女工の帰郷を含めた都市農村間の労働移動により結核の広範囲な伝播がおこっていたことを実証した。今後の近代日本経済史研究において、疾病・疫学研究との連携の可能性と有望性を示したその功績は高く評価できる。以上の結果から、本論文が博士（経済学）を授与される価値があると認める。